

つなぐ 56

2019年秋号
令和元年9月発行
第15巻第2号
(通巻56号)

地域医療を考えるペガサス情報誌



アジアで気づいた、
日本の介護。

Special



日本とベトナムを結ぶ 人材環流を通じて、 介護職の進化が始まった。

医師や看護師が科学的にも教育制度的にも

長い歴史を持っているのに比べ、介護職の歴史は浅い。

平成12年、介護保険制度が生まれ、

高齢化が進む現場の必要性に迫られて、

介護職に携わる人材が急いで育成されてきた。

介護保険が始まった当初、

新しい制度のもと高齢者をケアしていこうという

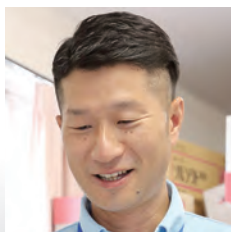
意欲に満ちた人たちが、続々と介護業界に参加した。

しかし、それ以降、教育制度や労働環境などの

整備は追い付かず、専門職としての社会的地位や



通所事業統括管理者
介護福祉士
吉井 宗広



ベガスケアプランセンター
統括管理者
河内 良祐



社会医療法人愛仁会
理事長
内藤 嘉之先生



評価も上がっていかなかった。

介護現場は次第に慢性的なマンパワー不足に陥り、

介護職のストレスも高まり、ここ数年、

その現場は閉塞感に包まれていたといえるだろう。

そんな閉塞感を打ち破るための、

新しい挑戦が大阪で始まった。

3つの社会医療法人を核とするグループが

タッグを組んだへ大阪A・P・Sコンソーシアム(後述)だ。

ベトナムの技能実習生に日本式介護を指導し、

ベトナムの介護事業の創生期に貢献しようという、

国際的な事業である。こうした動きが、

介護現場の閉塞感突破にどう繋がるのか…。

今回の『つばさ』はその取り組みを通じ、大きな成長と

進化を遂げつつある職員たちの姿を追った。



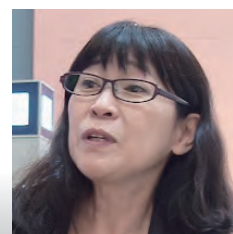
馬場記念病院
事務部部长
田中 恭子



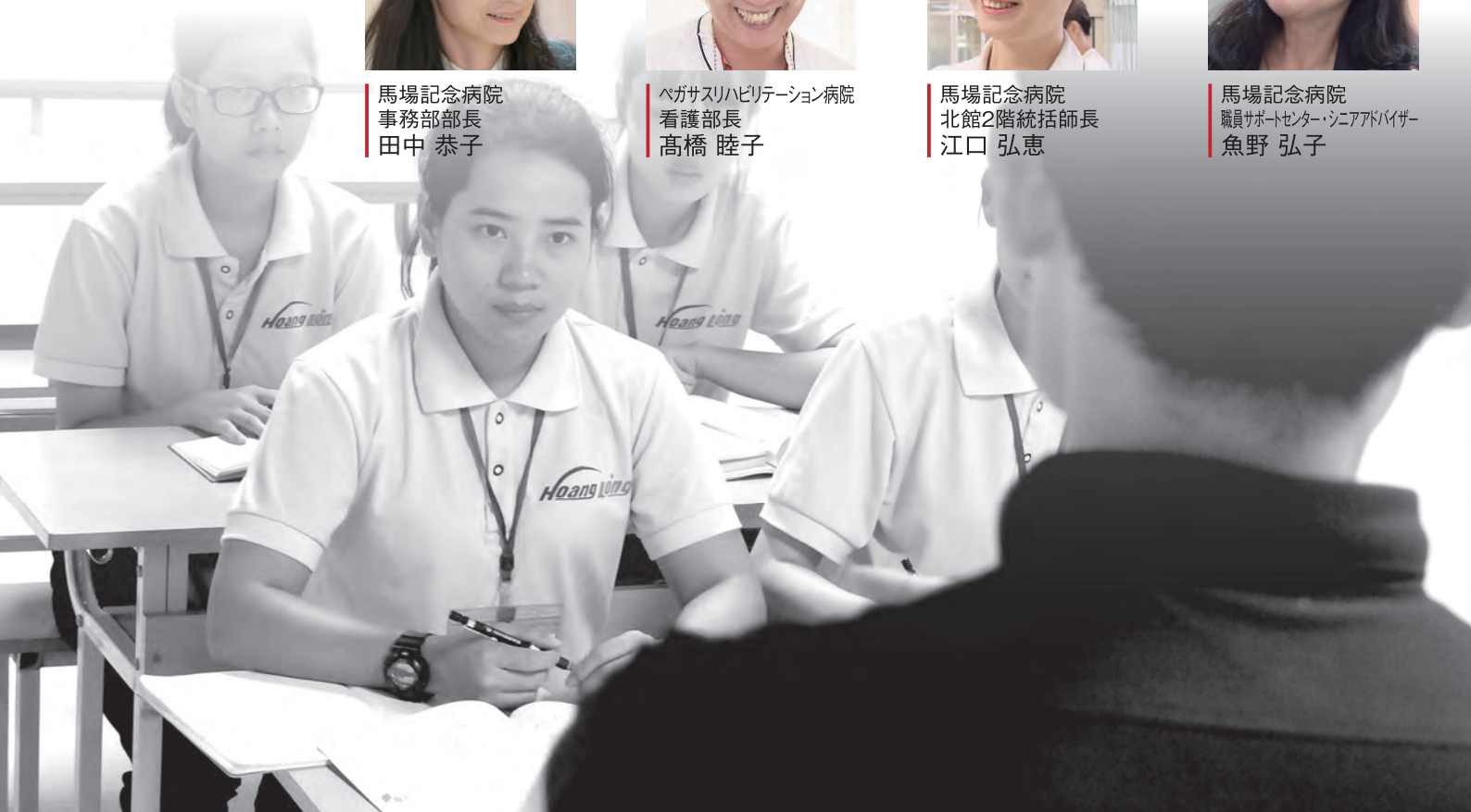
ベガスリハビリテーション病院
看護部部长
高橋 睦子



馬場記念病院
北館2階統括師長
江口 弘恵



馬場記念病院
職員サポートセンター・シニアアドバイザー
魚野 弘子



ベトナムに1カ月赴任し、 日本式介護を指導した職員たち。

ベトナム・ハノイにある技能実習生の送り出し機関、ホアンロン社の教育訓練センター。

この一角に、平成30年6月、日本の介護技術を教える

〈大阪A・P・Sコンソーシアム介護スキルラボ〉が誕生。

日本の介護福祉士が講師として交代で現地に赴き、日本式介護を教える取り組みが行われている。

試行錯誤しながら あふれる情熱を注いで 日本の介護を指導。

ペガサスからベトナムへの最初の派遣講師は、河内良祐（ペガサスケアプランセンター統括管理者・主任介護福祉士・介護支援専門員）である。派遣期間は平成30年7月24日から1カ月間。河内は〈大阪A・P・Sコンソーシアム〉で作成したカリキュラムに

則り、入浴、清潔保持、食事介助などの技術を教えていった。その終盤、技能実習生（以下、実習生）たちの実技テストを行うことになった。テーマは、ベッドから車椅子への移乗介助である。実習生たちはチームを組んで、ベッドに寝ているご利用者（実習生）を起き上げらせ、体を安定させ、丁寧に車椅子へ導いた。介護は多様な動作を組み合わせて行っていくものだが、実習生たちはその都度、「体にさ

わりますよ」「今から横を向きましょう」「車椅子に移りませね」と、日本語による声かけをしつかり行いながら、二連の動作をスムーズに実践した。さらに、実習生たちはそこで実技を終えず、車椅子での移動介助まで自主的に行って披露したのだ。

「パーフェクトだ」。河内は、自分の想像をはるかに超える実習生たちの成長ぶりを目の当たりに見て、ここに至るまでのさまざまなおもいが去来し、胸に熱いものがこみ上げてきた。気づいたら、人目もはばからず、号泣していた。

ベトナムの実習生に 日本式介護を教えるための カリキュラムづくり。

河内がそこまで涙した理由は、何だろうか。



愛仁会、ペガサス、生長会の頭文字をとって〈大阪A・P・Sコンソーシアム〉と名づけられた。

時計の針を2年前まで戻そう。(大阪A.P.Sコンソーシアムのプロジェクトがスタートしたのは、平成29年。この組織は、社会医療法人愛仁会と関連法人である社会福祉法人愛和会から成る愛仁会グループを代表とし、社会医療法人人生長会と関連法人である社会福祉法人悠人会、社会医療法人ベガサスと関連法人である社会福祉法人風の馬で構成されている。愛仁会、ベガサス、生長会の頭文字をとって「A.P.S」と命名された。

プロジェクトが具体的に動き出したのは、平成29年12月。各法人から介護のスペシャリストが集結し、コアメンバー会議が足した。河内はこの当時から参加し、教育カリキュラムづくりに尽力してきた。

「学習の目標や内容、教材、指導計画、評価の概要をどのように設定するか。全く白紙の状態からスタートし、みんなで議論に議論を重ねて決めていきました。ただ、法人によって介護に対する考え方や方針は少しずつ異なるので、議論が白熱することもありました」と河内。ただし最も難しかったことは、別にあつた。「苦勞したのは日本語の壁ですね。実習生たちは介護スキルラボに入学

する前から日本語を学び、準備を進めてくれました。でも、それがどの程度のレベルに達しているかはわかりません。その部分を想像しながら、より良い学習指導内容を模索していきました」。

講師の派遣後も カリキュラムを 随時見直していった。

カリキュラムづくりの試行錯誤は、講師の派遣が始まった平

「異国の地で、初めて講師という 立場になり、自分の成長に繋がる 貴重な経験ができました」と、河内。



ベトナムで一緒に過ごした講師と実習生の絆は強い。河内は日本に戻ってからも、実習生たちの研修に携わったり、相談に乗ったりしている。

成30年6月以降も続いた。「最初に愛和会、次に生長会の職員、三陣目に私がベトナムに行きました。最初の講師が「介護の言葉」を中心に指導し、(介護の知識技術)へと発展させていく計画でしたが、トップバッター

の講師から、「想像以上に日本語の学習が遅れている」という報告が入りました。このままでは講義を進行できないので、教育内容の見直しを余儀なくされました」と河内。

自分に置き換えてみるとよくわかるが、外国語の習得は一朝一夕にできるものではない。ベトナムの実習生にとっても、それは同じだった。二陣目の講師も、かなり日本語で苦戦し、カリキュラムの見直しが続いた。そうした経緯の末に、河内はベトナムに入り、同じように日本語での対話に苦慮しながら、介護技術を指導していったのだ。

「実技テストで感極まったのは、それまで苦勞していた2名の講師からバトンを受け取り、3人でこの3カ月間教えてきたことが、一つの成果に繋がったんだという喜びが大きいですね。振り返れば、コアメンバー会議が始まって8カ月余り、日本式介護をどうやって指導しようか、みんなで一先懸命考え、試行錯誤してきました。そんな努力の結果として、『実習生がここまでできるようになった！』という感激が、涙に繋がったんだと思います」と河内は照れ笑いする。

コアメンバー会議を通じて

多くの刺激を受ける。

もう一人、ベガサスからの派遣講師を紹介しよう。河内に続いて派遣された吉井宗広（通所事業統括管理者・介護福祉士）である。吉井もまた、河内と同じように、派遣前にコアメンバー会議に加わり、カリキュラムづくりに力を尽くしてきた。

この会議に参加し、吉井は大きな刺激を受けたという。「介護の専門職として高い意識を持つスペシャリストに出会い、メンバーたちと前向きな議論を重ねるうちに、自分たちにはまだまだ伸びしろがあるし、もっと頑張らなくては、と感じました」。

その刺激を、吉井はすぐに、新たな行動へ反映させた。「介護プロフェッショナルキャリアア段位制度（介護能力を評価する共通のものさしを作り、それに基づいて人材育成をめざす仕

組み）」のアセッサー（評価者）講習を受けたと、法人に申し出て、その資格を取得したのだ。「ベトナムの実習生を育成するには、その技能を正しく評価する技術が必要です。アセッサーの資格は、ベガサスの介護の高度化に繋がると考えたのです」と話す。

介護現場に重く

のしかかっていた

苦悩。

吉井はまた、このプロジェクトに参加することで、「介護の仕事に対する見方が少し変わった」とも話す。吉井は法人内7つのデイサービスセンターなどの通所事業所を統括し、約80名の職員を束ねる立場にある。しかしながら、その現場の運営は決して順風満帆ではない。「常に人材不足が続いて、新しい人材の確保もままなりません。それに加え、なかなか職員の意識を高めることができず、トップダ



ベトナムで実習生を教え、人材教育のやりがいや重要性を再認識したという吉井。その思いを胸に、ベガサスの介護の質を高める仕組みづくりに取り組む。

「介護は、ご利用者の尊厳を守り、人生を支える仕事です。アジアに出ることで、その価値に気づかされました」と、吉井。

ウンで指示を出しても成果が得られない。いわば、自分一人が頑張つて空回りしている感じでした」。

人材確保と教育の難しさ。その根底には、介護職に対する社会的な評価の低さがある。

「看護師などとは違い、介護職は誰にでもできると思われがちです。介護の専門職としてのプライドを持ちにくく、それが、モチベーションの低下に繋がっていると思います」と、吉井は分析する。





大阪A・P・Sコンソーシアムのプロジェクトを推進するために、河内や吉井をはじめとした介護福祉士たちは、ペガサス法人内でも何度もミーティングを重ねてきた。

しかし実際、介護は誰でもできるものではない。「今回、日本式介護がアジアで高く評価されていることを知り、介護の仕事についてもう一度考えてみる機会になりました」と吉井は話す。

アジアに飛び出して

気づいた、日本式

介護の素晴らしさ。

では、日本式介護とは何だろうか。「日本の介護は、単なるお世話ではなく、本人の自立支援が基本になります。ご利用者の生活背景を知り、できる限り残存能力を活かし、ADL（生活日常動作）を維持することにより、その人らしい生活をしていただくという考え方で

す。同時に日本の介護職は、ご利用者一人ひとりを尊重し、それぞれの尊厳のある暮らしを支える専門職でもあります」と、吉井は説明する。こうした介護の理念を、吉井は今までごく当たり前のこととして、実践に繋げてきた。ところが、ベトナムで指導することになり、その理念の素晴らしさに気づいたという。

「実習生たちは皆、ベトナムの看護学校の卒業生でしたが、自立支援、尊厳保持という考え

は、持ち合わせていません。たとえば、声をかけずにご利用者の身体に触れたり、自立を考慮せずに介助しようとした。しかし、それでは、ご利用者の尊厳を守ることはできません。日本の介護とは、ご利用者一人ひとりを大切に思い、その人生に深く長く寄り添う仕事です。そんな日本の介護の心を伝えるのに、私たち講師は大変苦労しましたし、アジアに飛び出したことで、日本の介護職の高い専門性に気づくことができたのです」と話す。

自分たちの介護を

一から見直す

きっかけに。

吉井はまた、ベトナムから帰国し、「ペガサスの介護サービスの質を高めなくてはならない」と考えたという。「実習生に介護の基本を一から指導するなかで、自分たちが日常業務で省略している部分があることに気づきました。実習生のお手本となれるレベルまで、自分たちの介護を高めたいと考えたのです」。

タイミングよく、ペガサスカフェ委員会（介護現場の代表者が集まり、より良いケアについて話

大阪A・P・Sコンソーシアム 介護スキルラボの事業計画

〈大阪A・P・Sコンソーシアム〉のプロジェクトは、内閣官房健康・医療戦略推進本部が推進するアジア健康構想(アジアで急速に進む高齢化に対応するための制度構築を、官民一体となって支援する取り組み)に基づいて展開される事業である。その内容は、以下の3つのフェーズ(発展の段階)から構成される。

第1フェーズ

ベトナムに、介護の教育機関「介護スキルラボ」を作り、3法人から交代で講師を派遣(約1カ月)。日本語による講義・実習により、日本式介護技術を指導する。(基本は8カ月のカリキュラム)



第2フェーズ

ベトナムの実習生たちが来日し、日本の現場でOJT(※)によってさらに専門的な介護技術を習得する。(基本は3年間。最長5年間)

※On the Job Trainingの略称で、職場で実務を通して行う訓練手法。



第3フェーズ

実習生たちはベトナムに帰還。ホアンロン社と提携して介護施設を開設し、日本で得た高度な介護技術をベトナムに根づかせていく。



プロジェクトの参加が 介護職員たちの 意識を覚醒させた。

ペガサスでは、河内、吉井に続いて、今日までに5人の介護福

し合う組織)で、「ペガサス共通の介護技術のマニュアルと評価ツールを作ろう」という動きがスタート。吉井は今、その先頭に立ち、ペガサス全体の介護の質を高める仕組みづくりに情熱を傾けている。

社士がベトナムに派遣され、講師の任務を果たしてきた(令和元年8月末現在)。そして、それぞれが予想をはるかに超えるほど、多くの収穫を持ち帰っている。

「ベトナムから戻った職員は皆、目を輝かせて、自分の体験や成長を話してくれます」。そう、うれしそうに語るのは、大阪A・P・Sコンソーシアムの発足当初からプロジェクトに関わってきた田中恭子(ペガサス法人本部理事・企画運営局局長兼

馬場記念病院・事務部部长)である。「最初にお話を聞いたとき、職員の海外派遣にとても興味を持ちました。これまで介護職員が法人の看板を背負って、海外へ行く機会はありませんでしたから、これはすごいチャンスになるだろう、と。言葉の通じないベトナムで1カ月間、現地の技能実習生の教育に携わる。その貴重な経験を通して、職員たちは介護の専門性や仕事に対する誇りを実感できたと思います」。



河内と吉井もベトナムでの講師経験を経て、より一層介護という仕事に誇りを持ち、より良いサービスを提供したいという思いを強くした。

笑顔で来日した ベトナムの実習生たち。

平成31年4月23日、
実習生の1期生が関西国際空港に降り立った。
関空で出迎えた職員のなかには、講師だった河内の姿も。
懐かしい顔を見て、1期生たちは安堵の笑みを浮かべた。

**慣れない日本で
安心して暮らせる
ようにサポート。**

1期生は各法人にわかれて
入職するが、ペガサスには5人の
配属が決まっていた。来日した
5人は荷物を解くために、まず
は寮に向かった。寮は馬場記念
病院から徒歩数分、ペガサスロ
イヤルリゾートの北側に隣接し
たハイツである。2人には2LD
K、3人には3LDKの住居が
それぞれ用意され、テーブルや

ベッド、調理道具など生活に必
要なものが一通り配置された。
広々とした寮に足を踏み入れ、
5人はうれしそうな表情を見
せた。

ペガサスの受け入れ担当者た
ちは、こうした寮の手配なども
含め、受け入れの準備をするた
めに、定期的にコアメンバー会
議に参加し、話し合いを重ねてき
た。介護実習の指導計画を作
成するとともに、日本での生活
支援態勢を整えていったのであ
る。技能実習責任者の魚野弘
子(馬場記念病院 職員サポー



寮の前でくつろぐ、実習
生たち。食事やお弁当
づくりもみんなで協力し
ながら、充実した日々を
過ごしているという。



関西国際空港に降り立った、実習生たち。
大阪A・P・Sコンソーシアムのメンバーが用意した、歓迎の横断幕を手記に記念撮影。

トセンター・シアアドバイザー)は次のように話す。「一般の報道では技能実習生の失踪や不法就労がよく取り上げられています。でも、私たちは決してそういう事態を招かないよう、

行き届いた環境を整えるよう知恵を絞りました。実習生を決して特別扱いすることなく、私たちの仲間の一員として迎えるために、ペガサス内部でも頻繁に会議を開いてきました」。

清拭や食事介助など 多様な介護技術を 実践的に学ぶ。

ゆくゆくは介護施設で活躍する彼女たちだが、最初の実習は馬場記念病院からスタートした。これについて、田中は次のように話す。「ペガサスには、〈医療がわかる介護職を育てよう〉という考えがあります。発症もない頃からの医療の流れを理解することで、将来、施設で介護に携わるときも、広い視野でご利用者を支えることができます。ペガサスでは、北館2階の病棟(脳神経外科)で基本技術を学び、6カ月目から南館の回復期リハビリテーション病棟に異動し、さらに技術を磨いてもらう計画を立てました」。

実習生たちは今、OJTを通じて、清拭、手浴、足浴、食事、移動など多岐に及ぶ介助技術を行っている。とくに、オムツ交換などの排泄介助は、日本独特なものであり、実習生たちは戸惑いながらも、一歩ずつ成長している。

「食事介助では、最後に〈あたりがとう〉と言ってもらえて、とてもうれしいですね」と、北館2階B病棟(一般病棟)に配属されたファム・ティ・ハインは笑みを



院内では、日本語を使うのが基本ルール。
「日本語が伝わらないときは、携帯電話の通訳アプリで意思疎通を図っています」と、江口。

浮かべる。また、患者さまとのふれあいも楽しみだという。「患者さまが大阪の観光スポットを教えてください、折り紙をくれたりして、とても励まされます」とチャン・ティ・ガンは話す。

一方、B病棟より重症な患者さまが多いA病棟(SCU・脳

卒中集中治療室を含む)では、そうした患者さまとのコミュニケーションは難しい。しかし、「清拭、手浴など、何かをするときは必ず声をかけるようにしています」と、グエン・ティ・トゥー・ハーは言う。「意識レベルの低い患者さまに対して、声をかける

のはどうしてですか」と尋ねると、「患者さまを尊重するためです」という答えが返ってきた。

技術とともに

大切なのは、

意味と目的。

北館2階統括師長の江口弘恵に、実習生の指導方針を聞いた。「大切にしているのは、一つひとつの行為の意味・目的をきちんと伝えることです。実習生が行うことはすべて、患者さまの安全な療養や自立支援に繋がっています。それを理解して実践できるように、なぜ手を洗うのか、なぜ口腔ケアを行うのか、などを丁寧に教えるようにしています」。その指導方針は、実習生の心に届いているようだ。グエン・ティ・ハイは、「どんな行為も、理由を教えてくれます。質問すると丁寧に答えてくれるので、すごく勉強になります」と話す。

また、江口は「実習生の存在は、私たち職員にとっても良い刺激になっている」と言う。「教えたことを全部吸収しようとする5人の素直さ、真面目さに感心させられます。何に対しても一生懸命取り組む姿は、本当にすばらしいですね」。

毎日、1時間、

日本語の勉強会も

継続して開催。

日々の仕事によりやく慣れてきた実習生たちだが、最も苦労しているのは、相変わらず日本語によるコミュニケーションだという。

「基本的な介護の専門用語はわかるようになりました。でも関西弁で早口で話されると、わからないこともよくあります」と、グエン・ティ・ホアは微笑む。

そんな5人のために、毎日1時間、日本語の勉強会を実施している。病棟の看護師が交代で講師となり、日本語と介護技



「患者さまやご利用者を大切に
する日本ならではの介護
の心をベトナムに持ち帰って
ほしい」と、高橋は言う。

術の講習を行っているのだ。その時間には、河内、吉井も仕事の合間をぬぐって顔を出すようにしているという。「ベトナムで教えていた職員が顔を見せると、5人の表情がパツと輝きます。まるで保護者が来たみたいなんですよ」と、江口は微笑む。河内や吉井も、教えるのこともいっても気にかけて、SNSなどで情報交換しているという。

この毎日の勉強会は、12月に行われる日本語能力検定試験（運営：国際交流基金と財団法人日本国際教育支援協会）と、介護実習技能評価試験（実施：一般社団法人シルバーサービス振興会、認定：厚生労働省人材開発統括官）をにらんで行われているものである。

チーム・ペガサスの

受け入れを通じて得た

職員たちの気づき。

実習生の受け入れにあたっては、介護、看護、事務など職種の違いを超えたチーム・ペガサスを結成し、さまざまな取り組みを行い、それは現在も続いている。派遣された介護職員だけでなく、受け入れ担当の職員たちも、この新しい取り組みを通じて、さまざまな気づきを得たという。



平成30年6月からプロジェクトに参加してきたペガサスリハビリテーション病院看護部長の高橋睦子は次のように話す。「河内さん、吉井さんをはじめ、普段は交流の少ない在宅部門の方々と話す場面も増え、介護職への理解が深まりました。介護職と看護職がそれぞれの専門性を認め合い、協力することで、もつとペガサスの看護・介護の質を高めていけると思えました」。また、今後も高齢者は一層増加し、介護現場の国際化が予想されている。そのことについて高橋は、「これからはさらに多職種・多国籍の協業が必要になると思います。医療に携わる人も介護に携わる人も、日本人も外国人も、お互いに認め合い、助け合っていきたいですね」と話す。





清拭や足浴をはじめとした病棟での技能実習、そして、日本語や介護技術の座学を通じ、実習生たちは日々、目覚ましい成長を遂げている。

大阪A・P・Sコンソーシアム 介護スキルラボの真の狙いとは。

〈大阪A・P・Sコンソーシアム〉はもともと、社会医療法人愛仁会の呼びかけで生まれた組織である。そこで、愛仁会の内藤嘉之理事長に、プロジェクトの目的などについて話を聞くとともに、ペガサスの理事長・馬場武彦に参画の狙いや今後の展望などを聞いた。

単なる人材確保とは 一線を画す 革新的な取り組み。

〈大阪A・P・Sコンソーシアム〉の誕生の経緯について、内藤理事長は次のように話す。「発端は、内閣官房が進めるアジア健康構想の日越ヘルスケアプロジェクト事業に参画したことでした。これは、世界的にも高く評価される日本の介護技術を用いて、

日本とベトナムの人材環流を展開しようという事業です。もちろん、その根底には日本の労働力不足を補うという意図もありませんが、それが主眼ではなく、自分たちの介護現場の閉塞感を破るきっかけになるのではないかと考えました」。内藤理事長が考える介護現場の閉塞感とは、何を指すのだろうか。「介護保険制度が始まった頃、現場は活気に満ちていました。ところが最近では、3Kの仕事と

言われ、働き手が減り、定着率も下がり、現場は相当苦勞しています。その閉塞感に風穴を開け、介護職員たちの目線を上げることができたらいいと考えたのです」。

そして、その考えに共鳴したのが、社会医療法人ペガサス理事長の馬場武彦だった。「プロジェクトの大まかな説明をしている間、馬場先生は静かに頷いて話を聞いていました。でも、『職員の目線が上がる』という話をしたら、馬場先生が身を乗り出して、『そういう成果が期待できるなら、私たちもぜひ参加したいです』とおっしゃいました」と内藤理事長は話す。

馬場は当時を振り返り、次のように語る。「介護職員をベトナムに送り出すことで、新しい刺激や気づきを得られるのでは



「介護現場の閉塞感に風穴を開け、職員たちの目線を上げたかったんです」と、内藤理事長は語る。



大阪A・P・Sコンソーシアムのプロジェクトはまだ始まったばかり。
ベトナムの介護スキルラボでは現在、1期生に続く次の実習生たちが一生懸命、日本式介護を学んでいる。

ないかと思いました。ベトナムから戻った職員が、目の前の介護実践だけでなく、組織としてどうあるべきか、というところまで考えるようになれば、周囲の職員の目線も上がっていくと期待しました」。

しかし、ただでさえ人材不足の現場から、責任者クラスの人材をベトナムに派遣するのは、現場にとって相当の負担になることは間違いない。内藤理事長は「その通りです。派遣される本人たちの自覚もですが、日

本に残った職員は、責任者が抜けた穴を埋めるためにどうすればよいかを、自分たちで考えます。そして、それを乗り越えることで、新たな自信を得ることができます。つまり、人材不足でギリギリのところへ、さらに

負担をかけて追い込むことで、大きな飛躍を期待したのです」と語る。

〈公〉ではなく、 〈民〉だからできる ダイナミックな挑戦。

一つの法人ではなく、3つの法人を核とするグループが手を組んだことも、〈大阪A・P・Sコンソーシアム〉の大きな特徴である。「技能実習生の教育は一つの法人が自分たちの手法や経験で行うべきではありません。そうではなく、もう少し広い視野でスタンダードな日本式介護の教育モデルを作るべきだと考

えました。そこで、医療法人のなかでも、方向性を同じくする社会医療法人に声をかけました」と内藤理事長は語る。

病院や介護施設には大きく分けて、〈公（公立公的）〉と〈民（民間）〉という設立母体の違いがある。このプロジェクトの公共性からすれば、〈公〉が率先して担うのが妥当な印象を抱く。しかし、内藤理事長は語る。「〈民〉だからこそ、新たな人材教育に挑戦できました。というのも、私たちの組織にとって、人材こそがすべてなのです。公的な組織とは違い、自分たちで人材を集めて育て、質の高いサービスを提供しないと、組織を持続





できないわけですからね」。

内藤理事長は一呼吸し、こう続けた。「今回のプロジェクトは、ほとんどが各法人からの持ち出しです。そんな不採算事業にあえて挑戦したのも、〈民〉ならではの思いです。一般に、

は、〈公〉が担うものと誤解されず。しかし実は、〈公〉は行政が承認した予算の範囲内で、採算に見合う事業でなければ、取り組むことができません。反対に、私たち〈民〉では一部門で採算が合わなくても、法人全体への波及効果や地域医療への貢

献を考えて思い切った投資ができます」。

〈大阪A.P.S.コンソーシアム〉では、この秋に第1期生の第二陣、来年は第2期生が来日する計画だ。最後に、今後の抱負について、馬場に聞いた。「プロジェクトは始まったばかりですが、職員

の成長という面で非常に良い手応えを感じています。これからも三法人が協力して事業を継続して、最終的には実習生たちがベトナムに帰り、日本式介護のバイオニアになって活躍してもらうまで実現していきたいと考えています。そして、日本とベトナム

の人材環流を通じ、私たちがガサスの介護現場ももっと活性化し、職員も組織もレベルアップしていけると期待しています」。

馬場は、法人の未来とベトナムの未来の両方に思いを馳せ、介護の進化と発展に期待を寄せた。

医療から、そして、看護、介護から、 地域社会を支える人々。

ペガサスは、地域の診療所、そして、看護、介護に関連する事業所と連携をしています。

診療所は、地域の皆さまにとって、医療を受ける「最初の窓口」。丁寧な診察による適切な診断・治療を行い、また、病院の紹介を通して、患者さまの「かかりつけ医」として、健康状態を総合的に管理してまいります。

看護、介護に関連する事業所は、在宅で療養する皆さまの「パートナー」。

ご本人はもちろん、ご家族の毎日を支えたり、快適な生活の場そのものをご提供により、皆さまを支援します。

第二特集では、こうした診療所、事業所をご紹介します。※診療所・アイウエオ順、そして事業所の順で紹介しています。

**整形外科と腎臓内科の専門医が協力し、
生活指導を含めた幅広い医療を提供。**

診療所

何でも相談できる

「町のお医者さん」を
めざして。

**整形外科として20年以上、
地域に根を下ろしてきた。**

南海本線堺駅の東出口正面にある、オレンジ色のビル。その1階にあるのが、長山整形内科である。堺駅から徒歩2分という好立地から、通勤・通学の帰りに立ち寄る患者さまも多いという。

開業は平成4年。その4年後

に現在地に移転し、20年余、整形外科の診療所として、肩・腰・膝の痛みや変形、骨粗鬆症、関節リウマチなどに対する診断・治療を行ってきた。そのなかで、とくに力を入れてきたのが、全身の筋力低下に対する運動療法だ。「たとえば手術した後、腹筋を鍛え太ももの筋肉をつけることで、回復力がぐんと増します。また、高齢者の加齢による全身機能の低下を防ぐために運動療法が有効です。そのことを早くからこの地域で提唱し、実践してきました」

と、長山 正院長は話す。小学生から高齢者まで、ケガや病気で来院する患者さまを、院長は一人ひとり丁寧に診て、苦痛を取り去ることを第一に考えた治療を提供している。

**二人体制になって、
医療サービスを拡充。**

若先生である長山郁恵医師による内科を併設したのは、平成30年4月。それまで郁恵医師は、腎臓内科の専門医として病院で豊富な診療実績を重ねてきた。しかし、「病院に紹介されてくるときは、すでに腎臓の機能がかなり落ちた状態で、透析治療にならざるを得ないことが大半でした。もっと

早期発見できれば、腎臓の寿命を延ばすことができる。そのため、父の診療所に入って頑張ろうと方向転換しました」（郁恵医師）。それから1年余り、患者さまは徐々に増え、糖尿病などの生活習慣病や慢性腎疾患を中心に、幅広い病気に対応している。郁恵医師が診療で心がけているのは、患者さまの考え方や生活を把握すること。たとえば、自炊しない人には、どんな惣菜やお弁当を選べばよいか、具体的に話しているという。

また、整形外科と内科という二人体制になり、提供できる医療サービスも充実した。「血液検査で腎臓などの内臓



に異変が見つければ、すぐ内科に声をかけます。薬の処方について相談することも多いですね」と院長。一方の郁恵医師も、「生活習慣病の運動療法について、院長から専門的なアドバイスももらっています」と微笑む。「ここに来れば、体の痛みも内科の悩みも一度に解消できるのが当院の強みです。当院で対処できない場合は、適切な病院や診療所を紹介しますので、どんなことでも気軽にご相談いただきたいと思います」と院長は話す。さらに今後は、在宅療養支援診療所として、訪問診療に取り組んでいく計画を持つ。「これからは、高齢で診療所に通えない方も増えていく

と思います。そんな患者さまやご家族の生活に寄り添い、最期の日までしっかり支えていきたいと考えています」。郁恵医師は、高齢者が多い地域の未来を見つめ、そのように抱負を語った。

とスタッフの教育からコツコツ取り組み、今日のようなリハビリテーション中心のクリニックを作ってきた。「当院の特徴は、優秀な理学療法士を揃えていることです。診療においては、医師と療法士と対等に意見交換しながら、患者さまにより良いリハビリテーションを提供しています。理学療法士たちは学会での症例発表にも積極的に取り組み、常に最新の知見を取り入れるよう努めています」と院長は話す。また、そうしたスタッフの力を最大限に引き出すために、同院では組織づくりに「チームSTEPS（医療のパフォーマンスと患者安全を高めるために、チームで取り組む戦略と方法）」という手法を取り入れている。「スタッフそれぞれが責任を持つて行動し、チーム医療を実践しています。たとえば当院の看護師や事務員も、私の指示を待つのでなく、患者さまのことを第一に考えて自主的に業務に取り組めるようになりました」（院長）。



長山整形・内科
院長：長山 正 医師：長山郁恵
所在地：大阪府堺市堺区戎島町3丁4 美立ビル1F
TEL：072-223-7675
診療科目：外科・整形外科・リウマチ科・リハビリテーション科・内科・腎臓内科・循環器内科

地域に根ざした整形外科として、 リハビリテーションに力を注ぐ。

診療所

最新の知見に基づく リハビリテーションを 地域の患者さまへ。

チーム医療の質を高め、 より良い医療を提供。

堺市東区にある西川クリニックは、平成5年開院。以来、26

年間にわたり、地域住民のニーズに应运えてきた。「開院当初は、整形外科という診療科があまり認知されておらず、接骨院と同じサービスを望む患者さまもいて、いろいろ苦労しました」。そう語るのは、院長の西川正治医師である。院長は整形外科に慣れていない

近年は、在宅医療のニーズに応え、通所リハビリテーションや訪問リハビリテーションにも力を注ぐ西川クリニック。「スタッフに恵まれ、質の高いリハビリテ



堺市医師会の会長として 地域医療連携に貢献。

西川院長は日々の診療のかわら、長年、堺市医師会の活動にも尽力してきた。特に力を入れてきたのは、地域医療連携の仕組みづくりだ。「患者さまに途切れない医療を提供し、療養生活を支えていくために、病院と診療所、介護施設などの連携が非常に大切です。そのため、病院の先生方と協力して地域連携クリニックパス（病院から在宅までを結ぶ一貫した治療計画）の開発と運用に力を注いできました。現

在、堺市医師会では、大腿骨頸部骨折をはじめ、13の疾患に対し、15個の地域連携クリニックパスを運用しています」と説明する。

さらに院長は令和元年6月、堺市医師会の会長に就任し、その責務は一段と重くなった。「人口動態が変わり、高齢者が増えると同時に、医療の高度化も進んでいます。医療が変われば、医師の意識も変わりますから、当然、医師会も変わっていくかばなりません。私は今、〈若い世代と繋がる〉をテーマに掲げ、情報発信に力を入れています。若いメンバーと一緒に医師会を活性化させ、より良い地域医療を作っていきたいと思っています」。院長は広く堺市全域の未来を見据え、力強く抱負を語った。



学生空手道の発展と育成に尽力し連盟より感謝状

医療法人薫風会 西川クリニック

院長：西川正治
所在地：大阪府堺市東区文六160-1 TEL：072-239-1141
診療科目：整形外科・リウマチ科・リハビリテーション科

**在宅療養から施設入居まで
ご高齢者の日々を継続して支える。**

事業所

**地域に根ざして、
地域の介護ニーズに
オールラウンドに応えたい。**

**おうちで過ごしやすいに
心地いい環境づくり。**

一見したところ、カフェか、一軒家のような落ち着いた佇まいを見せるのが、介護付有料老人ホームゆうあいである。オープンは平成29年9月1日。もともと堺区南庄町にあったホームを新築移転させた。2階建ての施設に、32室が配置されている。「夜間はスタッフが二人だけになるので、目が行き届きやすい2階建てにこだわりました。奥行きが深い廊下の端に立てば、一直線で全体を見渡せて、事故防止などに繋がっています」。そう話すのは、ゆうあい（運営：株式会社ライフメイト）の代表取締役社長、小川内桂太氏である。

をきめ細かく管理。訪問診療の医師とも連携しながら、慢性疾患などが悪化しないよう支えている。サービスのモットーは、自分が入居したくなるような心地いい環境づくり。スタッフたちは、アットホームな雰囲気づくりと温かいサービスを心がけている。また、日々のレクリエーションにも力を注ぐ。高齢者向けの教育メソッドを導入し、昼食後のひととき、みんなで頭の体操などを楽しんでいる。ご入居者同士の会話も弾み、食堂から明るい笑い声が響くという。

**スタッフもご利用者も
笑顔で過ごせるように。**



ゆうあいでは、このホームのほか、同じ堺区の徒歩圏内に、ケアプランセンター・ケアセンター、デイサービスを運営している。この幅広い展開について、小川内氏は次のように語る。「在宅療養から施設入居までの時間の流れをカバーすることで、ご高齢者の日々を継続して支えられるのが、私たちの強みです。ホームに入居している方のなか

には、ご自宅で過ごしていた当時からお世話していた方もおられ、ご家族にも安心して任せていただいています」。

小川内氏はもともと他の介護施設に勤務していたが、同社の前社長に「ぜひ来てほしい」と請われ、同社に転職し、平成29年より経営を引き継いだ。以来、小川内氏は社内の業務や勤務体制の見直しに力を入れ、スタッフが働きやすい環境を作ってきた。「スタッフが満足していると、ご利用者にいいサービスを提供できます。逆に、スタッフが我慢していると、その不満はご利用者にも伝わります。スタッフもご利用者も、みんなが笑顔になるような運営をめざしています」と話す。

今後の事業展開では、認知症に特化した介護サービスに着手する計画も持つ。「他の地域に進出するのではなく、この地域に求められる介護サービスをオールラウンドに提供していくのが、私たちの目標です。これからも、この地域に根を下ろして、一步一步進んでいきます」。



ゆうあい(運営：株式会社ライフメイト)

代表取締役社長：小川内桂太
本社所在地：大阪府堺市堺区綾之町東1丁3-32
TEL：072-223-5963 URL：http://www.yuuai.ne.jp
事業内容：デイサービス、ケアプランセンター・ケアセンター、介護付有料老人ホーム

つばさ 56
2019年秋号
令和元年9月発行第15巻第2号
(通巻56号)

地域医療を考えるペガサス情報誌

発行人 馬場武彦
編集長 平岩敏志
編集 ペガサス広報委員会 編集グループ
発行 HIPコーポレーション
社会医療法人ペガサス 〒592-8555 大阪府堺市西区浜寺船尾町東 4-244
TEL 072-265-5558 http://www.pegasus.or.jp/

つばさ 56

地域医療を考えるペガサス情報誌

今回の『つばさ』では、
海を超えて人材教育に取り組む姿をご紹介します。
より良い介護の確立をめざし、
それぞれに努力を重ねてきた三法人が、
交流・共同作業を通じて、
ベトナムに日本の介護技術を指導しようとするものです。

文化や歴史、環境や言葉の違う人たちに、
日本の介護を理解し、実践してもらうことを通じて、
私たちペガサスは、自分たちの枠を超え、
オリジナルモデルを、スタンダードモデルに。
それを裏打ちするエビデンス(科学的根拠)や、
プロトコール(規定や手順の計画)を確立することの大切さに、
気づくことができました。

ペガサスで展開する日本の介護を、さらに高めるために、
私たちの挑戦はこれからも続きます。

社会医療法人ペガサス 理事長 馬場武彦